「世界遺産」物語・・・⑦

イェローストーン

近藤　節夫

イェローストーンはアメリカ（世界）最初の国立公園にして、世界最大の活火山である。遥か人里を離れ、それがゆえに名を知られた大都会とのアクセスには、かなりの時間を要する。慌しい日本人旅行者があまり訪れない理由のひとつである。

しかし、このイェローストーンほどアメリカ人から愛されている観光地は他に例を見ない。ナイアガラ、グランド・キャニオンと並んで、アメリカ人が憧れる３大観光地のひとつと言われる所以である。

イェローストーンは広大な敷地内に山河あり、谷あり、滝あり、温泉あり、植物ありで、そのうえ豊かな自然の風景が抜群に素晴らしい。近くにはアメリカ大陸の分水嶺であるロッキー山脈や、敷地内を車で飛ばせば、すぐ映画「シェーン」の舞台として知られるティートン国立公園にも入ることができる。その中で何と言っても訪れる人びとを惹きつけるのは、ズバリ、野生動物の生態である。公園内のそこかしこで沢山の野生動物にお目にかかれる。

バッファロー、エルク（鹿）、グリズリー（熊）、ムース（ヘラ鹿）、マウンテン・ゴート（ヤギ）、野鳥、等がそこらじゅうを自由に動き回っている。人が襲われることもしばしばあり、夜の一人歩きは禁じられている。

右端が筆者

1986年初めてここを訪れた。自然の絶景や珍しい野生動物は言うに及ばず、高く噴き上げる間欠泉、ぶつぶつ熱湯と泡を吹き出している地獄、そして水量豊富な迫力ある滝に圧倒された。その２年後、イェローストーンは大きな山火事に見舞われた。この時消火作業をどうすべきか、連邦政府国立公園局内で大きな論争が巻き起った。ただちに消火剤を空中撒布して延焼を防ぐべきか、或いは自然を犠牲にしてまでもそのまま自然鎮火に委ねるべきか。喧々諤々の議論の挙句に出した結論は、後者だった。自然に委ねることにより、全公園面積の45%を消失する結果となったが、薬剤を撒いて野生動物の子孫を、また植物子種を根絶やしにすることを動植物保護の観点から避けたのである。

そして火災から２年後、再びイェローストーンを訪れる機会があった。野生動物はどうしただろう、植物は全部焼け落ちてしまっただろうか、と気にしながら４年前とは別のゲートから公園内に入ったとき、最初に目に入ってきたのはエルクが群れをなして走り去る姿だった。樹木は黒く焼け落ち、一部の森林地帯は焦土と化し、見ているだけで涙が溢れてきた。しかし、よく見てみるとその地表には新しい植物が育ち、可憐な花を咲かせ群生しているのが目に入ってきた。きっと、新しい息吹が芽生えたのであろう。これが大きくなって、再び大きな樹木に育っていくのだろう。陽が西に落ちると動物の遠吠えが聞こえてきた。近くには、あの恐ろしいグリズリーが健在なのだ。

心配していた野生動物や植物にとっては厳しい試練だったが、幸い生き延びることができたのである。感慨無量の思いで木の香が匂うロッジで静寂の中を眠りについた。